

待機する共同体

—— ナチス収穫感謝祭の参加者たち 1933 - 1937 ——

藤 原 辰 史*

目 次

はじめに —— ナチスの動員構造

- 1) すべてはその瞬間のために
- 2) 二つのベルク

1. 商魂たくましき村民たち —— 小銭稼ぎと動員

- 1) ビュッケベルク椅子 —— 総統が見たい方は椅子の
うえでどうぞ
- 2) 屋台
- 3) 混沌とした動員

2. 移りつづける中心 —— 我が故郷の誇り

- 1) 移動する政府
- 2) 通過地ヒルデスハイムの人々
- 3) 地元の誇り

3. 待機する共同体

- 1) ヒトラーが来た！
- 2) 軍事演習

おわりに —— プロセスに生きた人々

はじめに —— ナチスの動員構造

1) すべてはその瞬間のために

いま、アルフレートはヒトラーを見ている。

「笛吹男」、ドイツでは「^{ラッペンフェンガー}ねずみ取り男」の街と呼ばれるハメルン Hameln の南南東 6.5 キロメートルほどのところに、ビュッケベルク Bückeberg という丘がある（以下、地名は巻末の地図を参照）。1934 年 9 月 30 日、ここで開催中の第二回帝国収穫感謝祭に訪れているアルフレートは、70 万人ともいわれた参加者たちの歓声を浴びるアードルフ・ヒトラーをしっかりと

* ふじはら たつし 京都大学人文科学研究所

りと目に焼き付けている。演説をするために演壇に向かおうとするヒトラーの姿をみながら、アルフレートは購入していた絵はがきを取り出す。その絵はがきを片手に持ち、別の手で鉛筆を握る。裏面には、食糧農業大臣リヒャルト・ヴァルター・ダレーとヒトラーの楕円で囲まれた顔写真、第一回帝国収穫感謝祭の人々の群れを写した写真が貼られ、穂がたわわに穂った麦やパンの絵が装飾的に描かれている。中央やや上には「ハーメルン近郊のビュッケベルク」、その下に今日の日付、一番下には「第二回帝国収穫感謝祭」と記されてある（図1）。アルフレートは鉛筆でこう記す。



図1 1934年の第二回帝国収穫感謝祭で販売された公式絵はがき〔SAH 607/Nr. 555〕

ビュッケベルクから君たちにアルフレートが心から挨拶を送るよ。僕たちはヒトラーをとてもよく見ることができたんだ。ゲッベルスやゲーリングも。—— ちょうどいま、ヒトラーが演説をしているところだ、〔SAH: 607 Nr. 555〕

当日の消印を押されたこの絵はがきは、ビュッケベルクのすぐそばを流れるヴェーザー川 die Weser の下流、ハーメルンから約 65 キロメートル離れたニンブルク Nienburg という街に住む S の自宅に届けられ、いまはハーメルン市立文書館に保存されている。興味深いのは、「Soeben spricht Hitler,」というように、この絵はがきがピリオドではなくコンマで終わっていることである。この続きを書いた別の絵はがきがあったのか、それともヒトラーの演説を聞くためにここで鉛筆を止め、あとでそのままポストに投函したのか、あるいは感動のあまりこれ以上何も書けなかったのか、市立文書館に所蔵されているアルフレートという人物の発信（および着信）の手紙がこのほかにない以上、どれも想像の域を出ない。だが少なくとも、ヒトラーをみた瞬間の高揚感、ヒトラーが演説をしているときの緊張感、そして、ビュッケベルクにいない親友（もしくは家族）にもいま自分が体験している感動を味わってほしい、という願いは、このコンマから読みとれる。つまり、65 キロメートルも離れた親友や家族とこの瞬間の喜びを同時に共有したいと思わせるほど、新聞雑誌の写真でしかお目にかかれぬ身身のヒトラーを見ながら演説を聞くことは、当時の多くの民衆にとって大きな高揚感と陶酔をもたらしたのである。

このような帝国収穫感謝祭のいわば「ヒトラー・フィーバー」の例には、事欠かない。

ジャーナリストのヴァルター・ケンポウスキは、1970年代初頭、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）在住の500人に「あなたはヒトラーを見たことがありますか Haben Sie Hitler gesehen?」という質問をし、その回答をまとめた。このなかで、ビュッケベルクの事例を3つほど引用している。そのうちの一つ、1921年生まれの農家の主婦はこう答えている。「はい、私は、ビュッケベルクで彼を見ました。しかし、ほんのわずかな時間でした。そのころ、私は若い娘で、自然と夢中になりました。わたしたちは、わざわざそこへ出かけたものですよ」〔Kempowski 1971: 48〕。

そして、こうした「ヒトラー・フィーバー」が、大きな抵抗を受けることなく粛々と戦争準備を遂行したナチスの動員力の核であったことは、これまで指摘されてきたとおりである。1935年には約100万人、1938年には120万人の自発的参加者⁹⁾を得たこの帝国収穫感謝祭もその例外ではない。できれば永遠の体験であってほしい、いつまでも終わらないでほしい、という、いつまでもピリオドを打ちたくない心性は、この国家行事をたしかに支えていた。

2) 二つのベルク

けれども、本当にヒトラーの求心力だけで帝国収穫感謝祭の動員力、そしてナチス全体の動員力は説明できるのだろうか。わずかな時間、ヒトラーを見て「ハイル！」と連呼するだけである。会ったり話したりするより至極単純だ。必ずしもナチズムを信奉していなかった人々を巻き込む力は、それだけではまだ十分に説明されていない。たとえば、『あなたはヒトラーを見ましたか?』に掲載されている1917年生まれの美術史家の回答をみてみよう。「ビュッケベルクで。女性たちは白眼をむいて、濡れたボロ布のように倒れこみました。彼女たちは、屠殺された牛のように身を横たえて、深いため息をついていました。願いが叶えられた時の喜びでした」〔同上: 48-49〕。こうしたヒトラーを見た女性たちの放心状態は、ヒトラー崇拝の典型例とも読める。だが、これほどの高揚感、一瞬で生み出されるものなのか。ヒトラーをみた瞬間ばかりでなく、そこに至るプロセスもまた重要ではないだろうか。

ナチスはどのように人々の心をとらえ、戦争へと向かわせたのか？すでに幾度となく繰り返されてきたこの問いが、いまなお問われつづけている。自分以外の何かによって自分の生活が動かされていく、という感覚はヒトラー時代だけのものではない。そして、こうした時代のいわば集合的不安に押されるようにして、ドイツのみならず世界各地の数多くの研究者たちがこの難題に挑みつづけてきた。ヒトラー崇拝以外の要素も、つぎつぎに指摘され、いまだピリオドが打たれる様相を呈していない。それは、たとえば、労働者の組織としての労働戦線^{アルバイツフロント}や農業関係者の組織としての帝国給養身分団^{ライヒスネーデルシュテント}のような組織的要素、祝祭の挙行による大衆操作という呪術的要素、帝国民衆啓蒙宣伝大臣であり帝国文化局局長のヨーゼフ・ゲッベルスを主軸とするメディアの要素であった。国家イベントや映画にみられる「シンボルの政治」や「政治

の美学化」という側面も、ジョージ・L・モッセの『大衆の国民化』以降〔Mosse 1975〕、クロズアップされている。全体的な流れとしては、組織や暴力などのいわば「ハードな動員」という側面から、人々の心性に巧みに訴えかけ、人々を無意識下で監視する「ソフトな動員」という側面が重視されるようになってきている、といえよう。

以上の動員研究²⁾の事例として、ニュルンベルクの党大会に比重がおかれてきたことは、しかしながら、それほど問題視されてこなかった。というのも、人口の3分の1を占める農村の住人の「動員」に大きな役割を果たしたのは、党大会よりはむしろ、そのわずか2週間後に開催され100万人におよぶ動員力を誇ったにもかかわらず、わずかな例外³⁾をのぞいてこれまでほとんど注目されることのなかった帝国収穫感謝祭だったからだ。ゲッベルスたちは、神に収穫を感謝する伝統的な祭りを国家のイベントに仕立て上げ、ヴァイマル共和国の都市文化の熟成のなかで日陰者であり恐慌で負債を抱えていた農民たちを「国家の大黒柱」として称揚したのである。祝祭といえば党大会、という図式は、あまりにも都市偏重である。しかも、1934年に、『ニュルンベルクとビュッケブルク 1933』という多数の写真を掲載した記念誌が出版されているように、二つの「ベルク（丘）」の第三帝国における地位は、少なくとも当時はそれほど隔たったものではなかった〔NuB 1934〕。

収穫感謝祭よりも党大会の陰に隠れていた理由としては、レーニ・リーフェンシュタールの記録映画『意志の勝利』や、国際軍事法廷の舞台でもあったニュルンベルクのネームヴァリューがまず挙げられるだろう。党大会会場跡やドキュメントセンターが整備され世界各地から多くの人々が訪れているのに対し、収穫感謝祭の会場跡は、ハーメルンという観光都市の近くであるにもかかわらず全く整備されていないことも見逃せない。党大会と収穫感謝祭双方の会場設計に携わったアルベルト・シュペアの回想録でも、党大会は幾度も取り上げられていても、帝国収穫感謝祭は全く登場せず〔Speer 1969〕、ナチ時代の社会史研究の重要かつ大部の史料である亡命ドイツ社会民主党の同時代報告『ドイツ通信』（通称=「ゾパーデ」）にも、何度も紹介される党大会とは対照的に、収穫感謝祭はやはり一度も登場しない。世界恐慌のなかでナチ党に支持者を奪われナチ党を撃ち損じた社会民主党主流に抗議し、地下に潜った『ドイツ通信』の書き手たちでさえ、その関心が帝国収穫感謝祭に向いていなかったことは、強調されてしかるべきである。

それゆえ、2007年夏、私は、ニーダーザクセン Niedersachsen 州のハーメルン、ハーメルン・ピュルモント Hameln-Pyrmont 郡、ヘッサリングェン Hösseringen、ビュッケブルク Bückeburg、ゴスラー Goslar、そして州都のハノーヴァー Hannover の文書館、図書館、博物館などで史料調査を行い、帝国収穫感謝祭の参加者が書いた絵はがきの文面や郷土誌に記された回想録などを収集整理して、分析した。この祝祭の責任者である帝国民衆啓蒙宣伝省の史料が戦争末期に燃やされてしまい、ベルリン Berlin、コーブレンツ Koblenz、フライブルク

Freiburg の各連邦文書館には史料が少ないゆえに、地方の小さな文書館を廻ることで少しずつ帝国収穫感謝祭の内実に向っていくという方法が近道だからである。本稿で扱う対象が、全国各地から集団でやってきた人々ではなく、ビュッケベルク周辺の住人たちに偏っているのも、このためである。

ただし、この全体像を把握するのが困難な方法にも利点がある。ベルリンではなく地方から、ナチ時代の動員と参加のダイナミズムを追体験できることだ。たとえば、ビュッケベルクの祝祭を鮮明に描いた地方に住む書き手は、当事者も今もけっして少なくない。これらを読むと、予想どおり、ヒトラー崇拜を示唆する記述もみられた。だが、予想以上に多かった記述は、さきほどの美術史家の回答にあった「疲労」や「苦痛」といった一見否定的要素にみえる身体感覚や、とりわけ筆者にとって意外であった「小銭を稼ぎたい」や「たまには注目を浴びたい」というような一見俗っぽくみえる欲望など、従来それほど重視されてこなかった参加の要素であった。「家族や隣人たちが行くから」というような集合的心性や、「非日常性のなかに身を沈めたい」という大衆心理を、ここでは今後の課題としてひとまず度外視して、「動員」という説明で消えてしまう「個」の具体的な心身の「動き」をクローズアップしたい。これはまた、戦争へと向かう人々のありさまを個々の「動き」から組み直していくための出発点である。

ところでいま、ビュッケベルクの開催地を歴史記念地として保存しようとする歴史家たちの運動が、ネオナチの聖地になるのではという地元の批判にあい頓挫している。この事実からも分かるように、帝国収穫感謝祭は、しばらくハーメルン近郊の農村に埋もれていた現象であり、今ようやく目覚めはじめた歴史であるといえる⁴⁾。ビュッケベルク近郊の村に住むルート＝クリスティーナ・ヘーリングは、帝国収穫感謝祭を13歳のときに体験しているが、ビュッケベルクに対する村人たちの集合的記憶について、こう述べている。

ビュッケベルク祭は、戦後、人々の心のなかで押しのけられ〔verdrängen〕、写真や「思い出の品」は大部分が捨てられました。けれども、この祭典は私たちの地域の歴史に属するものです。〔Hörning / Albrecht 2004: 201〕

現地の人々の内面で押しのけられた歴史、精神分析の用語を借りれば、抑圧（verdrängen）されているこの秋祭りは、いまだはっきりと意識されぬまま私たちの時代に至る地下水脈を流れてつづけているのである。

以下、「小銭稼ぎのチャンスとしてみること」、「いままで平凡な村だった我が村の誇りとしてとらえること」、「疲労困憊になるまで待ちつづけること」の三点に祝祭の要素を絞る。「新しい政治」、つまり「大衆民主主義」を創出するための「世俗宗教」の「儀式」という枠組みに入りきらないような、生活者の凡俗な心性や感覚の動きを探っていこう。

1. 商魂たくましき村民たち——小銭稼ぎと動員

1) ビュッケベルク椅子——総統が見たい方は椅子のうえでどうぞ

ベルリンで刊行された『語れ、戦友よ！ Erzähl', Kamerad!』（1936）という書物に、1935年の帝国収穫感謝祭に参加した人物の声が匿名で掲載されている。同時代の書物であるため、ナチスのイデオロギーに忠実であるし、客観的な史料というわけではない。だが、実際の雰囲気や、参加者の心性を探るには絶好の史料なので、ここでじっくり見ていきたい〔Grube / Richter 1982: 125〕。

帝国収穫感謝祭は、ヒトラーの登場と演説がクライマックスである。1935年も例外ではなかった。以下の記述は、ヒトラーが会場に現れ、参加者の歓声を浴びている場面である。

この熱狂的な興奮のなかで、生活の重みゆえに腰の曲がった70代の白髪のおばあさんが、私を押します。「おばあさん、もうちょっと下の方に来れば、総統がもっとよく見えますよ！」このおばあさんの頬に涙が流れています。体の大きな人たちと人々の伸ばされた手のなかでもみくちやにされながら立つ！ しかも70年生きてきたのです！ もしかして、これが最後の年なののでしょうか？ 70年に及ぶ歳月の最後の年なののでしょうか？

そのおばあさんを私はすばやく引き寄せ、野外用の小さな椅子のうえに立たせます。誰も「降りろ！」とは言いません。私の両腕に支えられて、この農婦は風に吹かれる葉っぱのように震えます。おばあさんは手を高く伸ばし、叫びます。「ハイル！ ハイル！」

おばあさんは、椅子のうえに立つことは禁止されているとも思いましたが、でもどうしても一度だけ——

いや、私たちは総統を見ようとしたのにすぎないのですが、おばあさんは総統を体験しようとしたのです！ 日常を生きる勇敢なる女傑！

総統がこちらに来るのを確認し、私はおばあさんにそれを教えます。そこに彼がいますよ！ おばあさんは、私と同じように総統をみます。人生ではじめてのことです。総統は立ち、人々に挨拶をします。ハイルの叫びが総統のまわりでどよめきます！

おばあさんは、挨拶をつづけ、そして——すすり泣きます！ 喜びの涙！

通り過ぎました……

私は、この瞬間ほど感謝の念に満ちた、母というものの表情をみたことはありません。見物人たちの眼には涙がかすかに光っています……

〔……〕

ゲッベルス博士の演説。つぎにダレー。そして総統。総統の鉄のような言葉が現実として私たちの前に立ち現れます。私たちのなかに、新たな闘争、新たな勝利への意志が目覚

めます。ドイツは立ち上がり、戦う！ 私たちの旗のもとには、ただ勝利者のみが立つことができる！

そしてすべてが終わりました。――

再び列車が夜中ガタンゴトンと音を立てます。私たちを故郷に運ぶ――戦いの体験をも！

ドイツ農民の母よ、100万人のうちの一人であるあなたは、総統の体験それ自体をしたのです！ 私はあなたを通じて！ この体験は私の魂に焼きつけられています。

ヒトラーを見るという行為が参加者に涙を流させるような感動的体験であったこと、見るだけではなく、参加者たちがヒトラーに向かって一斉に「ハイル！」と連呼することが感動を高めたこと、演説のまえの軍事演習が参加者たちに大きなインパクトを与えたこと（1935年は、ヴェルサイユ条約を破棄し、徴兵制を復活させ、再軍備を宣言した転機となる年であった）が、引用しただけで17個の感嘆符をもつ、この高揚した叙述のなかから読みとれる。とくに「ハイル」の連呼は重要である。それは、ここに集まった農民たちや都市民たちがヒトラーの登場の脇役としてではなく、同等の主演として主体的に祝祭に関わっているからである。1935年10月6日の帝国収穫感謝祭の様子を撮ったプロパガンダ映画⁵⁾をみるかぎり、ヒトラーが登場すると、100万人と発表された参加者たちはほほみな目を輝かせて「ハイル！」と叫んでいる。野外の会場全体が揺れているような歓声であったことは想像に難くない。

ところで、この話の旨味は、腰の曲がった見知らぬ農婦のいわば「冥土のみやげ」にヒトラーを一目見させてあげようと椅子のうえに立たせた書き手の敬老精神と、椅子に立とうとする老婆を温かく見守る周囲の人々の思いやり、そして涙ながらに御礼を言う老婆の心の純真さである。この美談が、ナチスのプロパガンダに適合しやすいものであることは自明だ。けれども、ここで注目したいのは、この老婆自身ではなく、老婆の視線を高くすることに貢献した小さな椅子である。

この椅子は、通称「ビュッケベルク椅子 Bückebergerstuhl」と呼ばれる木製の折りたたみ椅子で、ヒトラーを長時間待つあいだに座るだけでなく、この老婆のように踏み台としても用いられた。しかも、無料で配られたのではない。地元の指物師が販売したのである。アウグスト・ブランダウという、ビュッケベルク近郊のエメルン Emmern という村の男性は、この椅子を売った体験をこう回想している。

祭典の数ヶ月前になると、私の代父で指物師のルートヴィヒ・ユルゲンスは自分の作業場で折りたたみ椅子を1000から2000脚ほど作りました。私は、〔収穫感謝祭が開催された〕数年間はずっと、夢中になって代父のそばにいました。

そうして、祭典の日がやってきました。人、人、人、数多くの人々が特別列車で次々にビューッケベルクに到着しました。村の周りには、多くの宿泊用テントが立ち並んでいました〔……〕

ほとんどすべての〔宿泊用に提供された〕農場の入口には、サイダーやビールの売り場がありました。私はエメルンの旧スポーツ広場に立ち、自分で仕上げた折りたたみ椅子を1脚1ライヒスマルクで売りました。ある年には125脚の椅子を売ったことを、いまなおはっきりと思い起こすことができます。私は〔売りながら〕こう叫びました。「総統が見たい方は、折りたたみ椅子のうえでどうぞ」。この椅子は参加者にとても気に入られましたので、売れ行きもよかったです⁶⁾。

ヒトラーを見て涙を流すおばあさんとそれを両手で支える若者という美談を演出していた「ビューッケベルク椅子」、これは、ブランダウの代父である指物師にとってみれば、最大で2000ライヒスマルクの売り上げも見込める臨時収入のチャンスだった。ブランダウ少年にとってもこの体験は心躍らせるものであったに違いない。当時まだ働いていない年齢だと推測されるが、代父がビジネスチャンスとばかりに折りたたみ椅子を大量に製作するのを横で熱心に眺めることができ、自らも素人ながら最高で125脚の椅子を売りさばけたからである。

2) 屋台

国家行事が貴重な小銭稼ぎの機会であったのは、指物師だけではない。ブランダウの回想にあったように、帝国収穫感謝祭では小さな屋台が軒を連ねた。普段は農業や手工業に従事している地元の人々は、ここでソーセージやビールなどを売る〔図2〕。有料トイレを設置する地元民もいた、という。

当局は、公正な価格帯で商売が行われるように、詳細なガイドラインを設定し、地元民に周知徹底した。ビューッケベルク近郊の村オール Ohr の郷土誌には、つぎのような記述がみられる〔VoB 2004: 216〕。

周辺の村々の住人たちは、この祭りに乗じ副業として小銭を稼いだ。必要不可欠である木造の小さなトイレを管理したり、飲みものや小型ソーセージを販売したりした。しかし、これら



図2 帝国収穫感謝祭時に出店された屋台
〔Museumdorf in Hösseringen の特別展より。
撮影日不明〕

待機する共同体（藤原）

べては、つぎのように厳しく規制されていた。

90 グラムまでの小型ソーセージ 1 本（＊）	0.45
90 グラム以上の小型ソーセージ 1 本（＊）	0.50
焼きソーセージ 1 本（＊）	0.45
ミネラルウォーター	0.25
レモンソーダ	0.30
ビール 4 分の 1 リットル	0.25
コーヒー 1 杯	0.30
ココア 4 分の 1 リットル	0.10
牛乳 4 分の 1 リットル	0.10

（＊）必ず小型パンか白パンを一切れ加えなくてはならない。単位はライヒスマルク。

このような商売は、地元の人々に多くの臨時収入をもたらした。けれども、必ずしもうまくいくとは限らなかったようだ。ハーメルンから西へ 40 キロメートルほど離れた都市ヒルデスハイム Hildesheim に住む M という人物は、1933 年 11 月 23 日付の書類で、当局に対し以下のような苦情を申し立てている。

私は、1933 年 10 月 1 日、ビュッケベルクに小型のテントで酒場を出店し、2100 マルクの売り上げを得ました。……土曜日〔同年 9 月 30 日〕はまだ全く売れませんでした。日曜日は、お昼の時間になると、ビールや飲みものを秩序立てて売りさばくことができないような状態になりました。2 時間後には、私の用意したビールジョッキ 1000 個が行方不明になり、そのうちのいくつかは野外炊事場から食べものをテイクアウトするときに用いられったり投げ捨てられたりし、ほかのジョッキは式典会場に持って行かれるか、周辺に捨てられました。それ以降、紙コップ、野外用コップ、それから魔法瓶を用い、見わたせないほどの人間の群れに恒常的に囲まれることでしか、酒場を続けることができませんでした。そのうちの幾人かは、私と手伝いの人々に高圧的な態度をとりました。テントの賃料、ジョッキの損失、輸送費、サービスがあまりにも高すぎて全く儲けがなかったのです。〔……〕ハイル・ヒトラー！〔Thimm 1999: 34-35〕

長い間ヒトラーの到着を待たされ、のども渇き、腹も減った人々が、まさにうねりとなって屋台に押し寄せる。そこにみられる参加者たちのエネルギーとそれがもたらす混沌が、この申立書に活写されている。もちろん、当局に苦情を訴えるほどの M 自身の商売への情熱も、見逃すことはできないだろう。ビュッケベルクは、こうした商品と金銭のすさまじい交換のうえ

で成り立っていたのである。当然、祭りの次の日のビュッケベルクは、ゴミで溢れていた〔図3〕。

3) 混沌とした動員

このゴミの山が象徴しているように、ナチスの祝祭は、けっして規律と秩序だけで成り立っているのではない。参加者たちのエネルギーは、抑えられるどころか、ビュッケベルクといういわば野外劇場で爆発したのである。1937年からはニュルンベルク Nürnberg の党大会会場にも大人向けのピヤホールから子ども向けの人形劇場まで娯楽施設が隣接されていたし、ニュルンベルクの市街では一般の参加者のみならず突撃隊までもが市で買い物に興じ、酒を飲み、売春宿に行き、騒ぎ立てた〔Zehnhefer 2002: 192-193, 田野 2007: 78-97〕。ヒトラーが演説する会場でもビールが飲み、横になって寝ることもできた。ビュッケベルクも同様であった〔図4〕。だが、その雑然さは党大会の比ではない。参加者とヒトラーのあいだは、党大会よりも圧倒的に近い。参加者たちがいるのは、単なる観客席ではない。演壇と来賓席を結ぶ花道には柵も壁もない。50センチメートルほど高く造られ、親衛隊が人垣を作って押してくる人たちを抑えているにすぎない。この道が「総統が民衆を通り抜ける道」とも呼ばれたように、アルコール臭さえ漂う騒がしい参加者の塊のなかをヒトラーが通っていくというビュッケベルク独特の演出が、祝祭を盛り上げるのである。このとき、人々は折りたたみ椅子のうゑに立ったり、手すりにもたれかかったり、つま先立ちをしたり、首を伸ばしたりして、各々自由気ままであって〔図5〕、なかにはヒトラーの手を握る農婦さえいるという有様であった〔図6〕。売り手は臨時収入を得ようと、買い手は渇きと空腹を満たそうと、それぞれ欲望をむき出しにし、そのエネルギーを放出させたのである。主催者も、ある程度こうした状況を黙認していた。



図3 帝国収獲感謝祭の次の日の写真〔Museumdorf in Hösseringen の特別展より。撮影日不明〕



図4 ヒトラーを寝て待つ女性〔Museumdorf in Hösseringen の特別展より。撮影日不明〕

一方、1933年10月1日の感謝祭の演壇で、ダレーはつぎのように述べている。「農民の労働を規定するのは、自然の永遠なる法則でもなく、気候や土壌でもない。資本主義的な市場観の遊戯のような規則が、農民を、カネ、利子、利益の狩りへと追い立てるのである」[NuB: 82-83]。また、「集約的にやりなさい！ 営農家よ。君はなによりも第一に商人なのだから」（同上）という不特定の資本家の声を批判している。というのも、この日、帝国世襲農場法が公布され、この収穫祭でも喧伝されたからである。この法律は、ある一定の土地を所有する農民に対し売買や譲渡を禁止するもの、つまり、市場から農業を切り離す試みだった。

にもかかわらず、少なくとも帝国収穫感謝祭では、こうしたストイックな農民像は、現実の凡俗な農民像とは大きくかけ離れたものであった。利欲物欲をユダヤ性であるとして根底から批判する世襲農場法のある

意味で「崇高」な理念は、商魂たくましき村民たちの「これに便乗してひと稼ぎしよう」という金銭欲にほとんど無力であったことを、この祝祭は示している。

とはいえ、自発的に売られ買われた「ビュッケベルク椅子」にせよ、ビールにせよ、ソーセージにせよ、有料トイレにせよ、絵はがきにせよ、どの商品も、利欲物欲を否定する帝国収穫感謝祭の潤滑油であり、運営を陰で支えていたことはやはり否定できない。そして、「125脚を売った」というような小さいけれども記憶に残るような誇りを得るチャンスさえ感謝祭は与えてくれる。農民は物欲に目がくらんではいけない、ドイツ古来の土地を守るのだ、という杓子定規な理念と、一儲けしたいという際限なく膨らむ卑俗な欲望がこの祝祭では混然一体となっているのである。



図5 1935年の第3回帝国収穫感謝祭でヒトラーを迎える民衆と親衛隊員〔Gelderblom 1998: 43〕



図6 ヒトラーの手を握る農婦〔Museumdorf in Hösseringenの特別展より。撮影日不明〕

2. 移りつづける中心——我が故郷の誇り

1) 移動する政府

帝国収穫感謝祭は地元の人々にしばしば「ビュッケベルク祭」と呼ばれたが、これは厳密に言えば正確ではない。開催地は、ビュッケベルクだけではないからである。開催年を追って見ていこう。

1933年10月1日の第1回は、まず、ヒトラー、ゲッベルス、ダレーをはじめとする幹部たちが、ベルリンで、各地域を代表してやってきた農民たちと「アイントップ」と呼ばれる簡素な雑炊料理を食べ、一緒に飛行機でハノーヴァーに向かう。ハノーヴァーからは、オープンカーに乗って、装飾が施された村々を通り、ひときわ煌びやかな装飾がなされたハーメルンの街を通り抜けたのち、ビュッケベルクへ。ベルリン、ハノーヴァー、ハーメルン、ビュッケベルクと、政府は分刻みのスケジュールで移動する〔Wittkowsky o. J.: 17〕。

1934年9月30日の第2回は、午前中にまずヒトラーたち幹部が「農民都市」ゴスラーに訪れ、カイザープラッツで式典を催したあと、ビュッケベルクに向かう〔Wittkowsky o. J.: 17〕。

1935年10月6日の第3回は、ヒトラーが、ハノーヴァーからビュッケベルクに向かい、終了後、ゴスラーに行く。そこで祝典を催したあと、特別列車でベルリンに帰る〔KAHP: 15 Polizeimaßnahmen〕。

1936年10月3日の第4回も、1937年10月2日の第5回も、ビュッケベルクからゴスラーという基本ラインは変わらない〔SAG: Abt. III Fach 162 Nr. 9, KAHP: 6 Allgemeines Erntedanktag〕。

このように、ビュッケベルクが中心であることは不変だが、1933年はベルリン、1934年以降はゴスラーが重要な開催地であったことが重要である。また、ヒトラーが自動車で通る街は必ず華やかに装飾を施さなくてはならなかった。ヒトラーが通過する場所はすべて動員がかけられたのである。そればかりでなく、ビュッケベルクの祝祭はラジオを通じて同時中継され、全国各地の伝統的な収穫感謝祭にもハーケンクロイツが飾られた。ベルリンのブランデンブルク門も例外ではなかった。まさに、ドイツ全土が収穫感謝祭一色に染まったのである。

2) 通過地ヒルデスハイムの人々

帝国収穫感謝祭の二大中心地ビュッケベルクとゴスラーの間の都市ヒルデスハイムは、1934年と1935年の2回、ヒトラーのオープンカーが通った。1936年はヒトラーを乗せた特別列車が通っているが立ち寄ってはいない。1945年3月22日に戦争で破壊されたこの都市は、現存する史料が極めて少ない〔Thimm 1999: 9〕。ヒルデスハイムの市立文書館に問い合わせたところ、史料はほとんどないという回答が帰ってきたが、その返答のなかに、ヒルデスハイム

の日常を調査した卒業論文が出版されており、そこでビュッケベルクについて触れられているという情報が記されていた。バーバラ・ティム『ヒルデスハイムにおける国民社会主義の痕跡』〔Thimm 1999〕がそれである〔図7〕。ここでは、ティムの研究に依拠しながら、ヒルデスハイムの帝国収穫感謝祭の痕跡を追ってみたい。

ティムによれば、単なる通過点であるにもかかわらず、ヒルデスハイムの当時の国道の一部が1937年に「ビュッケベルク通り」と名づけられるほど、ヒルデスハイムは帝国収穫感謝祭と深い縁があった。ほかに、ヒルデスハイムとその隣接する諸行政区で1940年に用いられた一年生向け初級読本『祖国のために手から手へ』は、この出来事を取り上げている。

アドルフ・ヒトラーがやってくる。

おかあさん！ レーネ！ いろいろなところでか
ねがなります！ いそいで！ アドルフ・ヒト
ラーがやってくる！ さっ—— ほら、かべのうえ
にハイニがもうすわっています。ぴょん—— ほら、レーネもかべのうえにすわっていま
す。わあ！ もうみんな、ちゃんと見られる。ああ、なんてたくさんの人たちでしょう！
おお、なんてたくさんのはたでしょう！ おや、シュレーダーさんのところには小さな
たのついたわっこの花かざりがあります。レーネはパシッと手をたたいて、よろこんでい
ます。けれども、ハイニはひたすらとおりを見つめているだけ。いつもゴスラーへとく
だっていくのです。あそこ—— あれはなんでしょう？ 1だいの車がかどをまがる——
もう1だい—— もう1だい！ 人びとはさけぶ—— 人びとは手をふる！ おかあさん、
あの人がきた、あの人がきたよ！ そうね、あれはあの人だわ！ アドルフ・ヒト
ラー！ へいしのようにせなかをぴんとおぼして、ハイニはかべのうえに立ちました。ハ
イル・ヒトラー！ ハイニはこうさけび、きちっとあいさつをします。アドルフ・ヒト
ラーはしょうねんたちを見ます。ヒトラーはあいさつをし、わらいます。せなかをぴんと
おぼしたハイニのまえをとったヒトラーは、ほんとうにうれしかったのでした。
〔Thimm : 31-32〕

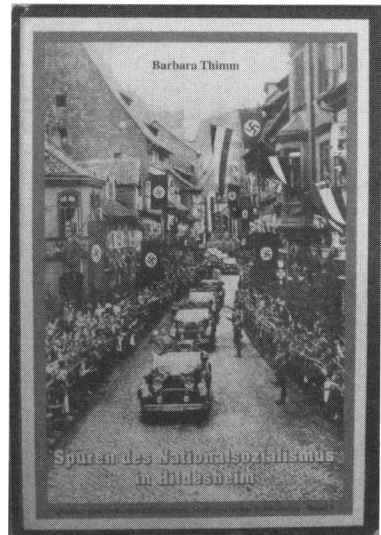


図7 バーバラ・ティム『ヒルデスハイムにおける国民社会主義の痕跡』〔Thimm 1999〕の表紙（写真は、1934年9月30日の帝国収穫感謝祭でゴスラーからビュッケベルクへ向かう途上、ヒルデスハイムで歓迎を受けるオープンカーのヒトラー）

ビュッケベルクからハーメルンを経てゴスラーへとヒトラー一行が向かう道で、ハイニ少年

とその家族がヒトラーの通過を待ち、ついに笑顔のヒトラーを見る場面である。「へいしのようになかをぴんとのばした」ハイニ少年をみて、ヒトラーが「ほんとうにうれし」く感じたという話が、すでに戦争に突入している 1940 年という年に、未来の国家を担う兵士としての自覚を持たせる教育効果をねらったものであることは言うまでもない。また、ハイニ少年の視点からヒトラーの視点へと移したあとで、ヒトラーの内面を推測ではなく断定で記述する最後の一文は、この教材を読む児童たちにヒトラーへの親近感を持たせるだろう。同じ教材のつぎの文章にも、ヒトラーの威厳というよりは、ヒトラーへの親近感を持たせようというねらいが窺える。

ビュッケベルクで

ハイニのおとうさんは、しゅうかくかんしゃの日にビュッケベルクへ行ったことがあります。ある日のこと——おやまあなんてことでしょう——ハイニとレーネはなにもかも知りたいとおもいました。おとうさん、アードルフ・ヒトラーをみたの？ おとうさん、ビュッケベルクにはどれほど人がいたの？ いつもこうです。おとうさん！ おとうさん！ おとうさん！ いつもこうなのです！

そして、だいすきなおとうさんは、こう言いました。すばらしかったよ！ あんなにたくさんの人たちを、おとうさんは一ども見たことがない。おお、色とりどりのでんとういしょうをきたおひゃくしょうさんたちが、なんてたくさんいたのでしょう！ ああ、みどりやおやあかのいしょうをきた女のおひゃくしょうさんたちが、なんてたくさんいたのでしょう！ なにもかにもがとても色あざやかだった。村からきた人たちも、町からきた人たちも、みんなよろこんでいたよ。

とつぜん、アードルフ・ヒトラーがきたんだ。いやちがう、それは、さけびごえとよろこびのこえだった。ほかの人たちがおすので、おとうさんはすこしもうごくことができなかった。さて、いよいよ、あの人がとてもゆっくりとおかをのぼってきた。とてもしたしみをこめて、ぼくたちにあいさつをしたんだ。おまえたち、おとうさんはヒトラーの目をじっとみた。アードルフ・ヒトラーはとてもきれいな目をしているんだ。

それから、おとうさんはこう言いました。

さあ、パンをおめぐみいただいたかみさまにかんしゃしよう！

さあ、せいかつがくるしい人たちに手をさしのべよう！

とかいでもいいなかでも、だれもうえてはならない。〔Thimm 1999: 33〕

オープンカーに乗ったヒトラーが一瞬だけ我が街を通る。このささやかな出来事は、しかし、ヒルデスハイムでもけっして小さくはない。いや、むしろそれが一瞬であるだけに、ハイニ少

年やハイニの父親がヒトラーを待ちつづける描写が重要になる。いまかいまかと待ちつづける緊張感が、ヒトラーを見たときの感動を高めているのである。

そのうえ、たとえ通るのは一瞬でも、飾りは華やかでなくてはならない。入口には「ヒルデスハイムは総統を歓迎する」というモミの枝葉で造られた大きな門が用意されたり〔図8〕、収穫感謝祭にちなんだ装飾品が街中に飾られたりした。これらは、エヌ・エヌ・フ라우エン・ゲゼルシャフト 国民社会主義女性協会の地方支部などの組織で作られた〔図9〕。自動車で通り過ぎるだけのヒトラーを見る時間の何倍もの時間を、準備にかける。ヒルデスハイムの帝国収穫感謝祭は、準備と待機にこそ本質がある、といえよう。

たとえば、シュレヴェッケのヒトラー体験は興味深い。1934年にヒルデスハイムに來たヒトラーについての想い出である。

農民たちの重労働に対する報いとして、ハーメルン近郊のビュッケベルクで収穫感謝祭が準備される。父は、農

民でなかったにもかかわらず、突撃隊とともに〔ビュッケベルクへ〕いかななくてはならない。母は、私たちと一緒にヒルデスハイムに旅行する。アードルフ・ヒトラーがここを自動車を通るからだ。ヒトラーがやってくる至るところで、熱狂的な歓声が沸き起こる。みんなが「ハイル、ハイル！」、そして「私たちの総統を見よう！」とヒトラーが姿を見せるまで叫びつづける。ついに、私たちは自分の目でヒトラーを見ることができた。共産主義者たちと内戦から私たちを救ってくれたヒトラーを。

二時間のあいだ、私たちは〔……〕石の台座のうえにある鉄の柵に寄りかかって待つ。ギュンター（筆者の兄）も、一緒にそこにいる。歩道は人々であふれ、道路の両脇は突撃隊員たちの人垣で遮断されている。

ついに、自動車がカイザーハウスの角を曲がった。——しかし、これは何だ？ 奇妙に



図8 1935年の帝国収穫感謝祭時、ヒトラーを歓迎するヒルデスハイムの門〔Thimm 1999: 31〕



図9 1936年の帝国収穫感謝祭でヒトラーを迎えるために、装飾品を作るヒルデスハイム国民社会主義女性協会の人々〔Thimm 1999: 35〕

静かなままだ。別の車なのか？——

より近くにやってくる。制服を着た一人の男が前に立っている。見たところまるで黄色っぽい人形のように直立不動だ。あちこちで、誰かが幾分嘆きながら叫んだ、「ハイル」——そうして通り過ぎる。

そう、彼がいたのだ！ ——それは、わたしが前もってイメージしていたものと、全く異なって見えたのだった。〔Schlewecke 1987: 28〕

1987年に書かれた回想録である以上、ヒトラーの姿の描写には誇張があるかもしれない。だが、シュレヴェッケにとって、クライマックスは意外とあっけなかったことはほぼ間違いないだろう。鉄の柵にすがりながら2時間も待つことは、ヒトラーの登場への期待を否応なく高めたにちがいない。そして、ヒトラーは共産主義と内戦から自分たちを救ってくれた救世主であるという誰からか聞いた話も、クライマックスに向けて気持ちを盛り上げる。だが、突撃隊のユニフォームを着たヒトラーは「黄色っぽい人形」にしかみえず、ヒトラーの登場にもかかわらず、「ハイル！」の声には嘆きが混じったのだった。

つまり、この例外的な落胆は、ヒトラー登場に至るプロセスの重みを意味しているのである。ヒルデスハイムまでわざわざ旅行をしてヒトラーを見にきたシュレヴェッケ少年のヒトラーに対する妄想は、2時間という待ち時間で、過剰に膨らんだのであろう。

ヒルデスハイムは、ヒトラーの通過地点でしかないにもかかわらず、否、通過地点でしかないからこそ、準備と待機という帝国収穫感謝祭の基本となる要素が露わになった場所なのである。

3) 地元の誇り

他方、開催地のビュッケベルク近辺の村民たちは、ヒルデスハイムなど他の地域と比べれば、特別な感情を持っていた。たとえば、ビュッケベルクから南東へ7キロメートルほど離れたベリー Börry という村の郷土史に掲載された、ルート＝クリスティーナ・ヘーリングの回想をみてみよう。

この祭の第一回目が開かれたとき、私は13歳で、わずか7キロメートルしか離れていないところで開催されたこの行事をよく覚えています。

1933年8月、帝国収穫感謝祭の開催地としてビュッケベルクが告知されたとき、私たち近隣の住人たちは、ビュッケブルク〔同じニーダーザクセンにある都市の名前〕近郊の丘を探しました。私たちの家の門の前にあるあの丘がビュッケベルクという名前であることを、知らなかったのです。

党大会が開催されたニュルンベルクと釣り合いのとれる場所が、ニーダーザクセンの保守的な農村で探され、理想的な地形としてビュッケベルクが見つけられたと知ったのは、のちのことです。

鉄道の線路，川，100万人以上の人々を集めることのできる丘，そして拡張された平らな地形が自由に使用されたうえ，国家の所有地になりました。

この土地が選ばれたのは，ここにたくさんのナチがいたからではありません。そのように私は強く反論しなくてははいけません。ニーダーザクセンは，ドイツの農民文化の核となる土地であり，そのうえ，広範囲におよびゲルフ主義〔教皇党〕と保守主義が根づいていたのです。

「帝国収穫感謝祭」というプロジェクトは，この地方で喜んで受け入れられました。農民たちは，1927年の農業危機で財政的困窮状態に陥ったのち，毎年収穫祭を祝うことには慣れていましたし，大きな公の関心が寄せられたことで，突然みずからの地位が高まったように感じたのです。

プロパガンダは農村住人の心を捕えましたし，「血と土」の根本思想と風俗慣習を新しくよみがえらせ，借金をかかえた農業がビュッケベルク祭で希望を持つための準備が充分すぎるほどになされました。

ビュッケベルク自体が，一つの大きな仕事場となりました。土地を平らにし，それを維持するために，労働奉仕団の収容施設が三ヵ所設置され，この工業の貧弱な地域から多くの失業者がやってきて，道路や小道を整備するために労働奉仕に従事したのです。

〔……〕

私たちが住む村々は，訪問者たちの宿営，広場のコンサート，そしてドイツ全土から訪れる自動車によってにぎわっていました。私たち若者は，こうしたことがとてもうれしかったのです。それにひきかえ，年輩の人たちは，投げ捨てられたゴミと騒音に苦情を言っていました。〔Hörning / Albrecht 2004: 201〕

注目すべきは，つぎの二点である。

第一に，ビュッケベルク近郊の村ベリーの住人でさえ，ビュッケベルクという地名を知らなかったことである。にもかかわらず，ヘーリングたちはこの無名の地に誇りを感じるようになっていく。この過程が興味深い。

第二に，自尊心の高揚である。「突然みずからの地位が高まった」という感覚，地元がにぎわうことにうれしさを感じる若者の心性，ナチズムを超越する農民文化の伝統への誇り，こういった郷土愛にも近い自尊心が周囲の村々を準備段階から動員するのに果たした役割はいくら強調してもしすぎることはないだろう。ベリーのようなビュッケベルク近隣の村は，それ自体

会場ではなかった。あくまで補助的役割を果たすにすぎない。だが、宿泊施設、駐車場、コンサート会場としての役割は、若い村民たちの「たまには注目を浴びたい」というような心性をくすぐり、年輩の人々を悩ませるのに充分であった。

「全国から注目を浴びた」、あるいは、「村がにわかに活況を帯びた」という感覚は、ほかにみられる。ビュッケベルクから7キロメートルほど西にあるグロース・ベルケル Groß Berkel という村の1993年の郷土誌に描かれた帝国収穫感謝祭をみてみよう〔Wzywa 1993: 224-225〕。

1933年10月1日に初のビュッケベルク祭（帝国収穫感謝祭とも言われる）が開催された。我が村は突然、ふたたび世間の注目の的となった。グロース・ベルケルはこの巨大な祭りを5回ほど体験した。30万人から100万人の人々を集めたこのマンモス・スペクタクルを正確に記述するとくどくなるだろう。しかしながら、グロース・ベルケルは、大きな村として大きな成果をもたらすことが義務とされた。学校は200人の来訪人たちを泊めなければならなかった。

つづいて、グロース・ベルケルの学校編年史が引用される。

ですから、授業は、休業日より8日早く終わられ、労働奉仕に振り替えられます。モミの木の子葉が森からつぎつぎに持って行かれ、勤勉な女子生徒の手は、花輪を数千メートルもつなげます。装飾には終わりがありません。洗濯場が食堂に転用され、そこで、味のすばらしいエンドウ豆のスープがボイラーを焚くようにしてゆでられました。腹ぺこの胃をかかえ、くたびれてこわばった足を引きずってきたすべての人たちに新しい力を贈るために。村自体が小さな都市になったのです。この収穫感謝祭を祝いにやってきた数千人の参加者たちをたえず運びます。

さらに、ベリーと同様に、若者と年輩者の対立も描かれている。

このほかにも、我が村には宿泊施設としてテントが張られた。というのも、グロース・ベルケルは「荷下ろし駅」だったからである。巨大なスピーカーがヒトラーの演説の媒体となった。音楽隊が演奏し、新しいドイツの挨拶「ハイル・ヒトラー」が歓呼された。若者たちは感動したが、老人たちは、ビュッケベルクの軍事デモンストレーションと収穫感謝の日といったどのような関係があるのか、と疑問に思った。この巨大な喧噪のなかで、おかしくて、不思議だが、喜ばしくはない事件がいくつか起こった。眠りにつく頃、宿泊

所はしばしばもう頑固な宿泊所の探し人たちで占められていた。朝、畑から干し草を取り入れようとするこの地方のある農民は、仕事を始めるまえにまず、3人のギムナージュムの第一級職員をそこから追い出さなくてはならなかった。また、自分の自動車を大急ぎで預けた数人の見知らぬ人たちが、〔それを預けた〕村の名前を忘れ、一日中諸部落をくまなく搜索しなくてはならなくなったのである。

若者の運動として登場したナチスは、このような、カオスさえもたらしかねないエネルギーで、近郊の村々の若者を惹きつけたのである。ただし、動員の構図はもっと複雑だった。自分の村は、どれほど全国的に注目を浴び、全国から人々が押し寄せてきても、結局、装飾を終わりなく作りつづけ、無数のテントを設営し、もてなさなくてはならなかったように、ビュッケベルク祭を何日も前から準備し、陰で支える場所ではなかった。

ビュッケベルクから西へ5キロメートルほど離れたオールの郷土誌の帝国収穫感謝祭についての叙述も、この二重性を如実に示している。「1933年から1937年まで開催されたビュッケベルクの収穫感謝祭のあいだは、オールでも大きな興奮がもたらされた。「上から」の命令により、毎年9月30日から10月4日までオールには320人の訪問者たちを宿泊させなくてはならなかった。そのうえ、オールは、第一番目の縦隊（エルツェン Aerzen 方面、グロース・ベルケルの駅に到着）の「収容地」と定められた。ハーメルン方面からやってきた車両も、フェリーボートが浮かぶヴェーザー川沿いの草地に設営された大きな駐車場に導かれなくてはならなかった。/工兵隊は、ヴェーザー川を横切るフェリーボートの上に張りわたした浮き橋を建設した。そこを、さきほど言及したあの第一番目の縦隊がビュッケベルクに向けて行進することができた。それは、収穫感謝祭のために特別に建設された三本の橋（グローンデ Grohnde、エメルン、オール）のうちの一本であった。渡し船業者の家の下流にあるかつての火の見やぐらにスピーカーが設置され、そこから、ビュッケベルクを目指す絶えることのない行進隊に対し、命令と指示が飛ばされていた」〔VoB 2004: 215-217〕。「上から」のさまざまな命令に従い準備と補助を遂行しなくてはいけないにせよ、やはり村に「興奮」をもたらしたのである。

ところで、ベリーのルート＝クリスティーナ・ヘーリングの回想は、つぎの一文で終わっている。「1938年、すでに準備の整っていた帝国収穫感謝祭は中止になりました。すべての物資をチェコスロヴァキア方面に輸送しなくてはならなくなったのです」。ヒトラーは、ドイツ人が300万人以上住むチェコスロヴァキアのズデーテン地方の割譲を果たすべく、軍事行動も辞さないという意志をこの年のニュルンベルク党大会で示していた。その期限が10月1日であった。ヨーロッパに戦争の機運が高まるなか、最終的に、9月29日から30日にかけて開催された英仏独伊4カ国の首脳によるミュンヘン会議で、ドイツへの割譲が決まる。地元の新聞にビュッケベルクの帝国収穫感謝祭の中止が決定されたのが9月30日、中止を告げる広告

が地元の新聞に出たのは10月1日〔図10〕、予定されていた日のわずか一日前のことである。10月1日から10日にかけて、ドイツ軍は、ビュッケベルク周囲の収穫感謝祭のために整備された鉄道も利用しながら、ズデーテンを占領した。この日のために村民たちが寸暇を惜しんで整えてきた準備は、これで水泡と帰したのである。

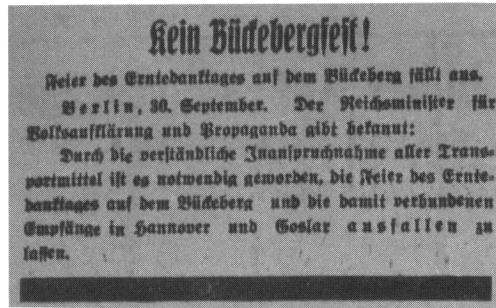


図10 1938年の帝国収穫感謝祭の中止を告げる新聞記事〔DWZ: 1938. 10. 1〕

脇役に甘んじながらも、自分の住む地域に誇りを感じ、大きな国家祭典を支えた村

民たち。ヒトラーが通る場所はどこもが中心であり、それを手伝う人々も充実感を得た。けれども、1938年の突然の中止は、村民たちの献身的な努力も、それに費やした膨大な時間もヒトラーの決断の前にはしよせん無に等しいことを明らかにしたのである。この大規模な軍事威嚇行動以降、帝国収穫感謝祭は二度と開催されることはなかった。

3. 待機する共同体

1) ヒトラーが来た！

ビュッケベルク椅子を売ったブランドウ少年やその代父にせよ、マナーの悪い客に儲けが出ず当局に怒りをぶちまけたMにせよ、こうした商魂たくましく民衆の姿と、我が村の近くで行われる国家行事を陰で支えることに自尊心を感じ興奮を覚えた村民の姿は、まったく異なる様相を呈しているようにみえる。だが、帝国収穫感謝祭を舞台裏で支えているという点では、どちらもかわりない。そしてどちらも、帝国収穫感謝祭のヒトラー登場というクライマックスに至るプロセスを構成している。

では、表舞台に立った参加者たちは、このクライマックスをどのようにとらえたのだろうか？ 先に引用した、老婆をビュッケベルク椅子に上げた人物の手記をみてみよう。

私は二度と忘れることはないでしょう！

1935年のビュッケベルクで開かれた収穫感謝祭のことです！

夜明けの冷たい風が吹くなか〔準備が〕進展します。そろった足並みと歌と一緒に。号令が響きわたります…

ヴェーザー山地の山の頂上で、定期的にライトが点滅しています。これは、夜間飛行機のための誘導灯です。ビュッケベルクに林立する旗が——まだ霧に覆われているポール

とともに——パタパタとひるがえりながら浮かび上がっています。私たちを歓迎するのは私たちのシンボル、そう、ハーケンクロイツです！

群衆が押し寄せます。10万人、いや、それどころか100万人？——

私たちは立っています！ 上方の演壇にいたる道沿いに立っているのです。総統が私たちの側を通ることになっています。

時計の針は7時を指しています。まだこんなに早いのです——お昼にならないと、総統はやってきません。長い時間。その瞬間のために準備を整えるには十分な時間です。そして——いつもよりも速く血が血管を駆けめぐっているのではないのでしょうか？

太陽が昇りました。雲はまだ太陽を覆っていますが、太陽が昇りました！

あらゆる方面から、人々の大群がゆっくりと押し寄せてきます。ゆっくりと、果てなく。私たちの眼は双眼鏡で地平線をくまなく探します。人、人、人。誘導部隊が道路の両側に並んでいます。マイクやスピーカーが、これから開かれる偉大なアピールのために秩序だって搬入されています。

今日この日を組織した人、それは巨匠にほかなりません！

音楽が鳴り響きます。儀仗兵^{きじょう}たちの登場です。壮麗な分列行進！

マイクの前で四つの楽団が整列しています。

行進曲！ 私たちは、〔舞台で行われていることをみようとして〕体全身を伸ばしました。私たちは立ちつづけます…〔民俗〕衣装を着た集団が踊っています。故郷の舞踊。

時計が進みます。私たちは偉大な体験の中心にいるのではないのでしょうか？ ……それに、旗は立ち並び森のようです！ 準備完了！ 人々の手が地平線を指します。鉛筆で書いたように、天空にハーケンクロイツが描かれます。これは空軍部隊です。ドイツの上空にハーケンクロイツ！ そして太陽が姿を見せます！

群衆が道で渋滞しています。これ以上動きません。ささやきが空気を劈き、それは大きなどよめきになりました。総統が来ました!!

総統は私たちのところへ、総統の農民たちのところへやってきたのです！

総統は車のうえに立ち、手で挨拶をします。歓声、歓声以外の何ものでもありません！ いま、総統が丘のうえに降り立ちました！ そこです、その下の方に総統が来ました。
〔Grube / Richter 1982: 125〕

ビュッケベルクという平凡な丘が、地平線を臨界とする広大な祝祭空間として、これまた17個の感嘆符を用いて活写されている。こうしたダイナミックな空間のなかにヒトラーが登場する。参加者はまさに至福の瞬間を味わっているかのようなのである。この瞬間が帝国収穫感謝祭のクライマックスであることは、やはり否定できない。

だが、重要なのは、この書き手が、クライマックス自体よりも、そこに至るプロセスを具体的に生き生きと描いていることだ。これと比べれば、クライマックスの主役であるはずのヒトラーの描写は——時代の制約も考慮にいれなくてはならないにせよ——決まり文句で粉飾され、平凡である。「時計の針は7時を指しています。まだこんなに早いのです——お昼にならないと、総統はやってきません。長い時間。その瞬間のために準備を整えるには十分な時間です。そして——いつもよりも速く血が血管を駆けめぐっているのではないのでしょうか？」という叙述や、「準備完了！」という表現は、「総統が〇〇する」「総統が〇〇にいる」という内実の乏しい報告調の文体と著しく対照的だ。

参加者たちは、ヒトラーを見るという目的のために、前日からハーメルン近郊に泊まり、あるいは自動車や列車を乗り継ぎ、最後は隊列を組んで徒歩でビュッケブルクにやってきた。1935年以降、早いものでは明け方の5時に到着し、7時にはかなりの空間がすでに埋まっていた、という。ヒトラーが来るまでの「長い時間」を劇やコーラスを鑑賞したり、飲食を楽しんだりしながら過ごす。この長時間の「待機」は、ヒトラーが来るという単純な現象を否応なく崇高なものにエスカレートさせる。しかしながら、観客は本当にヒトラーその人に感動したのだろうか。何時間も待ちつづけてようやく目にしたヒトラーが実は「黄色っぽい人形」としか見えなかったというシュヴェレッケの体験が示唆しているように、ヒトラーを待つ人々は、ヒトラーその人というよりは、ヒトラーを見るために自分たちが成し遂げてきた苦痛や疲労を伴うプロセスにこそ、酔っていたのではないのか。じっさい、ヒトラーが去ったあとにすさまじい疲労感が襲ったという報告は枚挙に暇がない。

たとえば、ニーダーザクセンのゲマインデ（都市ビュッケブルクの近郊）、バード・アイゼルンに住むKという商人の1933年10月1日付の日記（ビュッケブルク州立文書館に所蔵）から、つぎのような描写を見出すことができる。

私たちのすぐ前をヒトラー、フォン・パーペン、ゲッベルスが車で通り過ぎる。100万人以上の人々。すばらしい雰囲気だ。途方もない雑踏のなかに、私たちは紛れる。自転車を引き渡したあと、私はもっと広場に近い方へ行こうと試みる。——けれども、至るところに巨漢のSAがいる。私がようやく数人の人たちと限られたスペースに場所を確保したとき、ここにもSAがやってきて、偉そうに私たちを追い出した。——これで私は楽しむ気持ちが失せ、自分の自転車を取りに行き、のんびりと家へ帰った。もっとも楽しみにしていた軍事ショーを見ることなく。——7時頃、私はくたびれ果てて schachmatt 帰宅した——つぎの日の午前になって、ようやくエルンストが死ぬほどくたくたになって戻ってきて、すぐに就寝した。[SAB: D 18 Nr. 16]

また、帰宅後のビールが格別なものだったことは、1937年10月3日付のKの日記をみるまでもなく容易に想像がつくだろう。「7時30分ごろ、帰宅し、ポテトサラダとミニソーセージ、ビール半リットル、骨の折れる移動のあとにはたまらない」〔SAB: D 18 Nr. 17〕。

ほかに、ハーメルン市立文書館に保存されている別の絵はがきには、つぎのようなメッセージもあった〔図11〕。「皆さん！/僕たちは、ここ〔ハーメルン〕で無数に設置されたテントのうちの一つのなかで藁袋のうえに横たわり、飯を食っているところ。エルナはもう4切れ〔のパン〕を食べたけど、僕は一切れ食べたあと、もうどんなに頑張っても食べられない。NSJB⁷⁾と数人のSSもちょうどいま到着。僕は眠りたくてしょうがないよ。だって、死ぬほど疲れたから」〔SAH: 607 Nr. 544〕。ビュッケベルク椅子を売ったあの少年も、「晩になると、私はあまりの疲労にベッドに身を投げ出しました」と回想を締めくくっている。長いあいだ待たせたり、商売をさせたりして疲れさせることは、もちろん参加人数が多いからであるが、演出の一部でもあるだろう。じらしているのである。そうでないと、わざわざ7時から会場に参加者を集合させない。待てば待つほど、クライマックスへの緊張感は高まる。この効果をねらっているのである。

この「じらし」効果は、従来の「新しい政治」や「世俗宗教」という概念を援用すれば、救世主としてのヒトラーを演出するもの、と説明することができるだろう。だが、それだけではまだ不十分である。もっと技術的にとらえなくてはならない。「じらし」は、クライマックスを高めるばかりか、クライマックスの内実を隠しさえする。「黄色っぽい人形」としかみえないかもしれないヒトラーを文脈で覆い隠すことができる。構成員が何かを期待し待機しつづけることを特徴とするような共同体は、たとえ最終的に目的が期待するものとは違っても、手段が目的を凌駕し、オートマティックに進展していく。帝国収穫感謝祭は、まさにこの「待機する共同体」の典型にほかならない。

2) 軍事演習

そして、この内実の空虚さを覆い隠すのに最も貢献をしたのが、収穫を神と農民に感謝するという本来の目的とはおよそかけ離れた大規模な軍事演習なのである。とくに1935年からの演習は実戦さながらの華々しいものであった〔写真12〕。



図11 帝国収穫感謝祭の公式絵はがき〔SAH: 607 Nr. 544。日付不明〕

さきほど引用した日記の書き手、商人の K はナチズムの信奉者ではなかった。SA を「偉そう」だと批判し、「(自分は) 国民社会主義に興味があるわけではない」〔SAB: D 18 Nr. 16〕と述べ、「ヒトラーが、取り巻きに囲まれ、来賓席スタンドへ、民衆の歓喜のなか進む。——このような歓迎ぶりだと、この男は誇大妄想を抱くに違いない!」〔SAB: D 18 Nr. 17〕とやや皮肉めいたことを口に出している。だが、その K は、1933 年、1935 年、1937 年と 3 度もこの祭典に参加している。その最大の理由が軍事演習であった。彼は、ヒトラーを見ることよりも軍事演習を「楽しみに」していたのである。以下は、「1935 年 10 月」と附記された日記である。



図 12 1937 年の帝国収穫感謝祭における軍事演習の様子。ビュッケドルフが爆撃機によって攻撃を受けている。〔SAG: Nachlass Darré Nr. 112〕

もちろん、私たちも「ハイル・ヒトラー」と叫ばなくてはならない。「バーデンヴァイラー行進曲」⁸⁾ が演奏される。ほぼ 30 分つづく。〔……〕スピーカーが式典の内容を伝える。——〔……〕けれども、とりわけ興味深かったのは、国防軍のショーであった——戦闘機——戦車——砲兵隊——歩兵隊——などなど——最後には、木材と厚紙で作られた教会も備わっている村が爆撃された。一台の戦車が燃えさかる家を通り抜けた。〔同上〕

ここから、ナチズムを信奉するかしないかという内面のレベルとは無関係に、軍事演習を通して人々がこの感謝祭に動員されていく構造の一端をみることができるだろう。ビュッケベルク近郊の村フレンケの郷土誌に掲載されたつぎの収穫感謝祭の体験記からも、軍事演習がどれほど参加者たちを魅惑するものであったか読み取ることができる。

「お偉方たち」の挨拶のあと、とてつもないショーが人目を惹いたことを覚えている。下方の国有地に実物どおりの村〔＝ビュッケ村〕が建設された。造りは簡単であった。この村は、すべての人たちの目の前で、戦闘機の攻撃とそれにつづく戦車の攻撃を受けたあと、歩兵によって短時間のうちに焦土にされてしまった。

私にとって魅力的だったのは、大きな複数の球体状のものを高射砲で撃つことだった。これらは空に高く浮かんでいたが、破裂して、収穫の輪やそれに類するものが中から出てきて、空中を漂い、地面に落下した。ほかに、森の端に繫留気球が浮かんでいたが、そ

れは一定の料金を支払えば起こっていることすべてを鑑賞できるものだった〔Hölscher 2000: 385〕。

70代の老婆を助けたあの人物もこう述べている。「大砲が鳴り響きます。ビュッケドルフ〔ビュッケ村〕をめぐる嵐のような会戦。すばらしい劇！——」〔Grube/Richter 1982: 125〕。硝煙が立ちこめ轟音が鳴り響く「とてつもない」「軍隊ショー」は、こうしてあらゆる参加者を魅了した。

つまり、再軍備宣言によってヴェルサイユ条約を破棄した1935年以降、ヒトラーの登場と演説のまえに、もう一つのクライマックスが登場したのである。これによって、収穫を神と農民に感謝するという祭りの本来の目的は完全に名ばかりのものとなった。戦車、急降下爆撃機、高射砲、機関銃などドイツが誇る近代兵器を駆使した模擬戦は、待ちつづけた参加者たちの目を釘付けにし、心をつかむ。待ちつづけることから来る倦怠や疲労を充実感に一挙に変換するこのような構造は、1934年の干ばつ、価格政策の失敗、穀物の強制調達、世襲農場法による担保の禁止、脂肪の不足などつぎつぎに難題の降りかかる農村の住民たちにとっても効果的であったに違いない。

おわりに——プロセスに生きた人々

「商魂」、「地元の誇り」、そして「待機する共同体」。この三つの生活や身体に根ざした現象が帝国収穫感謝祭の参加者たちの声から浮かび上がった。では、これらを通じて明らかになったナチス動員の特徴とは何か？

それは、人々があくまで媒介として間接的に、プロセスでしかない状態に安住しながら、しかし自発的に、楽しく、エネルギーに参加することである。ゲッベルスは、プロパガンダは間接的でなくてはならないと述べたが、これはナチスの動員構造を分析するうえでも示唆的である。商品という媒介。ヒトラーの通過地という媒介。ヒトラーを迎えるために準備し、ヒトラーの登場、軍事演習、そしてヒトラーの演説を待機する自分という媒介。こうした媒介がなければ、帝国収穫感謝祭は100万人の参加者をさばくことができなかったであろう。そして、帝国収穫感謝祭を支えた人々は、ついに、ヒトラーの領土獲得戦争の媒介となり、前線と銃後で戦争を支えていく。ナチスは、ナチズムの確信的な支持者のみならず、屋台を出店したが客のマナーの悪さにナチ当局に苦情を申し立てたMや、国民社会主義自体に疑問を抱く商人Kのような者たちの参加がなければ、第一次世界大戦が終わってからわずか20年後に——しかも条約で軍備制限が決められていたにもかかわらず——戦争を起こすほどの力を持ったなかったに違いない。じらしてクライマックスを盛り上げるという企画者（あるいはプロパガンダ

で人々をナチ化したいという宣伝者)の意図と、現実から目を背けつつ国家に奉仕せよという為政者の意図、そして、主体性を失わず現実疑問を抱き行動するより、上から与えられた課題に没頭し、それに身を委ね、できれば平凡な人生を送りたいという人々の凡俗な願望の癒着がこうした参加を可能にしたのである。

村民はどれほど臨時収入に心をときめかし、自分の村が世間に注目されることをうれしく思っても、しょせん、祭りの準備の担い手、祭りの潤滑油でしかない。我が故郷はヒトラーと彼が率いる軍隊の通過点でしかない。そもそもビュッケベルク一帯が、最終的には、ズデーテン占領というヒトラーの帝国主義的欲望の媒介でしかなくなるのである。つまり、本来の主役である農民を含め、民衆は目的のための媒介にすぎない。しかも目的は明確ではなく媒介だけが肥大していく。だが、それでよい。装い、備えて、待つ。このサイクルに身を任せることが、つまり、いつまでもピリオドを打つのに躊躇しコンマでとどまっても反抗しない心性がこうやって形づくられていくのである。誰かに自分の生を保護してもらう未成年状態からの脱出は、ナチス・ドイツの住人たちの多くにとって、停滞したままだったということができるだろう。

そして深刻なことに、この停滞、すなわち、プロセスにいつづけることこそが、集団のテンションを保つ。これがゴールである、と宣言した瞬間に緊張は弛められる。ナチスが理想とした集団のあり方は、^{フォルクスゲマインシャフト}「民族共同体」にほかならない。そもそも、ヴァイマル共和国末期、経済危機と貧困が深刻化し、労使対立が激化するなかで緩んできた「国民」の結束力を高めるために、ナチスは「民族」を新しい紐帯として掲げる。さらに「民族」は、国外のドイツ人を含み国内のユダヤ人を排除するため、「国家」のかわりに「共同体」というロマンティックな概念とドッキングする。たしかにナチスは、600万人といわれたドイツ人失業者に職を与え、「階級対立」を解消したかのように見えた。けれども一方で、1934年前半の干ばつを引き金とする穀物・飼料不足と穀物調達措置という行政介入〔古内 2003 参照〕、世襲農場法により土地を担保に資金を調達できなくなったことや、1935 年以降は軍需産業復興を原因とする農業労働力不足への不満が農村に蓄積する。「民族共同体」というスローガンは、少なくとも農村では大きな力を持ち得なかった。それでも、この理念を謳いつづけるためには、途上にあることをたえず強調しなくてはならない。ヒトラーの演説が行事のはじめにであったり、ヒトラーが人々を出迎える構造であったりしたならば、約 100 万人の動員のテンションを「じらし」が支えている帝国収穫感謝祭がそもそも成り立たなくなるように、のっけから安定しているとはいえない「民族共同体」もまた瓦解してしまうのである。

それゆえ、帝国収穫感謝祭がズデーテン危機で幕を閉じたことは、非常に象徴的である。祝典に動員するために整備された交通網が、兵士と兵器を戦地へ運搬した瞬間に、5 回にわたって変化を遂げた祭りはその役目を終えた。干ばつや度々の失政で基盤が揺らぐ共同体のテン

ションを保つものは、ここからはもはや模擬戦でなくてもよい。模擬戦で誇示した軍事力を国際社会にちらつかせることで、共同体の結合力は否応なく高まるからだ。

目的が変質しようが、目的自体が無くなってしまおうが、参加者たちはかまわない。プロセスに自分の生を見出したからである。ドイツの歴史家ハンス＝ペーター・ウルマンは、「事実1900年頃に世俗化が加速したのだとしても、世界の解釈と意味づけへの要求は依然として大きいままであった」〔Ullmann 1995: 195〕と述べている。第一次世界大戦後、世界を解釈し、そのなかでどう生きるべきか、人々に示すことはより困難になった、といえるだろう。そうした危機状況で、たとえば、たしかにナチスは人々に誇り高きドイツ人として生きる「意味」を与え、「ゲルマン的土着性」と「ユダヤ的根無し草」という二構図式を導入できた。だが、より問題なのは、この単純な図式を信じるのはか手前で、人々は思考停止のまま、生活に埋もれ、内実の変質する何かを待機していたことである。戦争への道を準備したのは、理念や信念というよりはむしろ、鈍感と停滞なのである。帝国収穫感謝祭に生きた人々は、これを証言している。

注

- 1) 本稿では、帝国収穫感謝祭に集まった人々を基本的に「参加者 Teilnehmer」と表現する。観衆、観客、受け手というような受け身を想起させる言葉では不充分だからである。自発的に会場に足を運び、ヒトラーを見て、「ハイル！」と連呼した人々は、ほとんどの場合、強制されてやってきたわけではない。祝祭の客体ではなく、主体としてみるのが、ナチズムの動員のメカニズムを知るうえでは、きわめて重要である。
- 2) ナチスの動員力の根源を疑似宗教的あるいは呪術的な側面に求めたクラウス・フォン・ドゥング『呪術と操作——国民社会主義のイデオロギー的祭儀と政治宗教』（1971）は、収穫感謝祭を「イデオロギー的祭儀」の一例として取り上げている。史料の限界から、民衆の参加がもたらした「祭儀に対する民衆の共感」という視点で考察されるにとどまっているが、「神への感謝」という伝統的な収穫感謝祭のテーマが消滅していくプロセス〔Vondung 1971: 83〕、各地で同時に開催された収穫祭が次第に人々の心から離れていったこと〔同上: 106–107〕、そして、民衆啓蒙宣伝省が「総統の道」を「民衆を貫く道」と名義変更するように指示したこと〔同上: 155–156〕に、1971年の段階ですでに目を配っていたことは、先駆的研究として評価すべきである。また、ナチスの政治の美学化を総花的に論じたものとして、ペーター・ライヒェルの『美しい仮象——ドイツ・ファシズムの暴力と魅惑』（1991→新装カラー版2006）が代表的であり、ここでも数葉の写真とともに帝国収穫感謝祭が紹介されている。ヒトラーが装飾された村々を自動車で通ること、1935年から軍事演習が見せ物として大々的に展開されるようになることなど、帝国収穫感謝祭に特徴的な点も触れられている。だが、収穫感謝祭の軍事化の問題に偏向しすぎていて、「美しき仮象」に対する参加者の具体的な言動は全く触れられていない〔Reichel 2006: 273–277〕。また、日本のナチスの動員を「美学化」の視点からとらえたものとして代表的なのは、田野大輔『魅惑する帝国——政治の美学化とナチズム』（2007）である。ここでも帝国収穫感謝

祭は触れられていないが、党大会やキッチュなどの分析を通し、「比較的ソフトで平凡な動員」〔田野 2007: 304〕が論じられている。党大会の娯楽的要素の重要性、ヒトラーの「親密さ」に関する考察、動員の熱狂のなかに併存する「冷静で覚醒した精神」〔同上: 271〕という視点は、帝国収穫感謝祭の分析でも有効である。

- 3) 帝国収穫感謝祭の研究は、日本はもちろん欧米でもほとんど進んでいないのが現状である。この準備と内容について最もまとまった歴史研究の成果としては、ハーメルンのギムナジウムの教師であり郷土史家ベルンハルト・ゲルダースブロムの研究〔Gelderblom 1998〕がまず筆頭に挙げられるべきである。基本的な史実のみならず、当時の新聞を丹念に追うことで、労働奉仕団の声や、当時作られた詩なども紹介している。枚数の制限上、本稿で取り上げる参加者の書いたものや語ったものは、ほとんど論じられていない。それ以外には、メディア論の立場から、ベルント・ゼーゼマン〔Sösemann 2000〕が挙げられるが、言説分析が主である。新聞や演説、詩などの分析は興味深い、参加者の言説については論じられていない。また、ハーメルン市立文書館が編纂した市史の第4巻が「ビュッケベルクの帝国収穫感謝祭 1933-1937」であり〔Wittkowsky o. J.〕、必要な情報が的確にまとめられていて、有用である。日本では、さしあたり、概説的論文である拙稿〔藤原 2007a〕と、ビュッケベルクおよびゲルダースブロム宅への訪問記〔藤原 2007b〕を参照。
- 4) ハーメルンの郷土史家ベルンハルト・ゲルダースブロムは、ニーダーザクセン州の歴史文化財保護局宛にビュッケベルクの負の遺産としての歴史的価値を述べ、その文化財としての保護を求める要望書（2007年4月17日付）を提出している。さらに、2002年6月には、「ビュッケベルク会議」が開催され、ゲルダースブロムはもちろん、ペーター・ライヒェルをはじめとする歴史家たち54名が、州が決定した文化財保護のやり方を検討している。だが、ハーメルン・ピュルモントの郡長は、「私に可能なありとあらゆる手段を用いて」徹底抗戦する構えをとっており、いまだ解決の糸口は見えていない〔藤原 2007b: 100〕。
- 5) このプロパガンダ映画は、ベルリン連邦文書館の映画文書館 Filmarchiv に保存されているものであるが、筆者が、ニーダーザクセン州のヘッサリンゲンの博物館村 Museumdorf in Hösseringen で催された帝国収穫感謝祭の特別展「ビュッケベルクの帝国収穫感謝祭 1933-1937 — 国民は総統（誘惑者）に感謝する Reichserntedankfeste auf dem Bückeberg 1933-1937: Ein Volk dankt sein (Ver-) Führer」に訪れたおりに見ることができた。Führer は「総統」、Verführer は「誘惑者」という意味である。この特別展のアドヴァイザーはベルンハルト・ゲルダースブロムである。ヘッサリンゲン以前には、ブラウンシュヴァイクでも開催された。
- 6) Dorfmuseum in Hösseringen の特別展示より。
- 7) Nationalsozialistische Jugendbetriebszellen 国民社会主義青年経営細胞の略称。企業に属する若手ナチの団体。共産党の同類の組織に対抗するために結成。1933年10月17日にヒトラー・ユーゲントの下部組織になった。
- 8) パーデンヴァイラー行進曲は、ヒトラーお気に入りの軍隊マーチである。バイエルンの作曲家ゲオルク・フルスト（1870-1936）が、バイエルン王国の歩兵師団のために作曲した。

参考文献

1. 未刊史料

- [KAHP] Kreisarchiv Hameln-Pyrmont ハーメルン＝ピュルモント郡文書館
[SAB] Staatsarchiv Bückeburg ビュッケブルク州立文書館
[SAG] Stadtarchiv Goslar ゴスラー市立文書館
[SAH] Stadtarchiv Hameln ハーメルン市立文書館

2. 新聞

- [DWZ] Deister- und Weserzeitung ダイスター・ヴェーザー新聞

3. 公刊史料

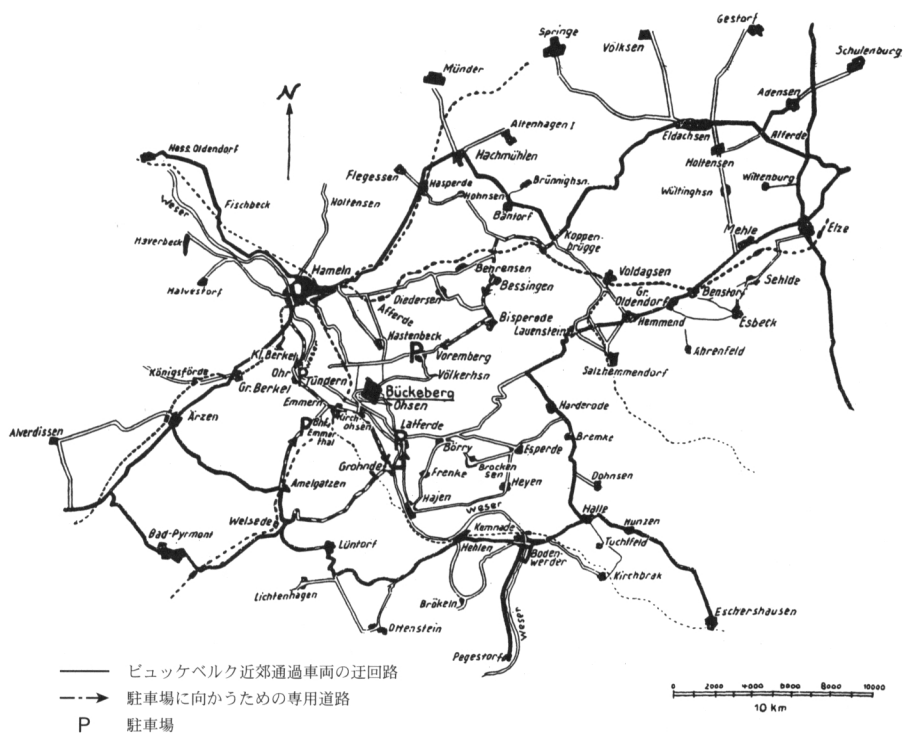
- [Gelderblom 1998] Gelderblom, Bernhard, *Die Reichserntedankfeste auf dem Bückeberg 1933–1937*, CW Niemeyer, Hameln, 1998.
[Grube / Richter 1982] Grube, Franke / Richter, Gerhard, *Alltag im Dritten Reich: So lebten die Deutschen 1933–1945*, Hoffmann und Campe Verlag, Hamburg, 1982.
[Hölscher 2000] Hölscher, Wilhelm, *Frenke: Begegnung mit der Geschichte unseres Ortes*, Frenke, 2000.
[Hörning / Albrecht 2004] Hörning, Heike / Albrecht, August, *1000 Jahre Börry: Geschichte und Geschichten vom Dorf und seinen Menschen*, Hameln, 2004.
[Mosse 1975] Mosse, George L., *The Nationalization of the Masses: Political Symbolism and Mass Movements in Germany from the Napoleonic Wars through the Third Reich*, New York, 1975. (邦訳＝[モッセ 1994])
[Müller-Partenkirchen 1934] Müller-Partenkirchen, Fritz, *Rund um den Bückeberg: Gelebniße und Berichte vom Ersten Deutschen Erntedanktag am 1. Oktober 1933*, Möser, 1934.
[NuB 1934] *Nürnberg und Bückeberg*, Völkischer Verlag M. O. Groh, Dresden, 1934.
[Schlewecke 1987: 28] Schlewecke, Georg, *Stirb er anständig!: Kindheits- und Jugenderlebnisse mit dem Dritten Reich 1932–1945*, Lutherisches Verlagshaus, Hannover, 1987.
[Sösemann 2000] Appell unter der Erntekrone. Das Reichserntedankfest in der nationalsozialistischen Diktatur, In: *Jahrbuch für Kommunikationsgeschichte* 2 (2000), S. 113–156.
[Speer 1969] Speer, Albert, *Erinnerungen*, Verlag Ullstein, Frankfurt/M., Berlin, Wien, 1969. (邦訳＝[シュペーア 1970])
[Thimm 1999] Thimm, Barbara, *Spuren des Nationalsozialismus in Hildesheim*, Verlag Gebrüder Gerstenberg, Hildesheim, 1999.
[Ullmann 1995] Ullmann, Hans-Peter, *Das deutsche Kaiserreich 1871–1918*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1995.
[Vondung 2007] Vondung, Klaus, *Magie und Manipulation: Ideologischer Kult und politische Religion des Nationalsozialismus*, Vandernhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1971. (邦訳＝[フォンドウング 1988])
[VoB 2004] Voß, Wilfried, *1000 Jahre Ohr: Eine Dorfchronik*, Hameln, 2004.

- [Wittkowsky o.J.] Wittkowsky, Johann, *Stadtgeschichte Hameln 1919-1949 Band IV: Die Reichserntedankfeste auf dem Bückeberg 1933-1937*, Stadarchiv Hameln, Hameln, o. J.
- [Wyrwa 1993] Wyrwa, Irmgard, *Groß Berkel: Ein Dorf stellt sich vor*, Flecken Aerzen, Aerzen, 1993.
- [Zehnhefer 2002] Zehnhefer, Siegfried, *Die Reichsparteitage der NSDAP in Nürnberg*, Verlag Nürnberger Presse, Nürnberg, 2002.
- [ケンボウスキ 1973] ケンボウスキ, ワルター 『君はヒトラーを見たか 同時代証言としてのヒトラー体験』(到津十三男訳), サイマル出版会, 1973 年(刊行月は不明)。
- [シュペーア 1970] シュペーア, アルベルト 『ナチス 狂気の内幕——シュペールの回想録』品川豊治訳, 読売新聞社, 1970 年 11 月。
- [フォンドゥング 1988] フォンドゥング, クラウス 『ナチズムと祝祭——国家社会主義のイデオロギイ的祭儀と政治的宗教——』(池田昭訳), 未来社, 1988 年 3 月。
- [田野 2007] 田野大輔 『魅惑する帝国——政治の美学化とナチズム』名古屋大学出版会, 2007 年 6 月。
- [藤原 2007a] 藤原辰史 「大地に軍隊を捧げた日——ナチスの収穫感謝祭」小関隆編『記念日の創造』人文書院, 2007 年 5 月, pp. 57-86。
- [藤原 2007b] 藤原辰史 「帝国収穫感謝祭の丘を訪ねて ハーメルン紀行——ナチスが組織した熱狂と陶醉」『at』第 10 号, 2007 年 10 月, pp. 88-104。
- [古内 2003] 古内博行 『ナチス期の農業政策研究 1934-36——穀物調達措置の導入と食糧危機の発生』東京大学出版会, 2003 年 12 月。
- [モッセ 1994] モッセ, ジョージ・L 『大衆の国民化——ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化——』(佐藤卓己/佐藤八寿子訳) 柏書房, 1994 年 2 月。

待機する共同体（藤原）



地図1 北ドイツ



地図2 ビュッケベルク近郊〔Müller-Partenkirchen 1934〕